

随想

現在の経済と人材という財産

生産現場におけるプロフェッショナル

加藤 宏光

《副島隆彦^{（そえじま）}》という世の中の事情を斜に構えて論評する経済・地政学の論者がいる。この人の著書に『欧米日やらせの景気回復』というものがある（徳間書店、二〇一二年四月三十日第一版）。帯に書かれた「私は昨年十月三十一日に最後の円高である一ドル七五円三二銭をつけたあと敵の姿を見失った。（中略）そして三月十四日になって初めてすべてを分かった。つながりなかつた何本もの太い糸が一瞬のうちにつながった」という文に惹かれて購入したのである。

この本では世間の常識とされている国際・国内状況がさまざまな解釈でストーリーづけられている。それはそれで極めて面白く、またある意味でブレイクストーリーミングに役立つ。

ちなみに、副島隆彦氏は、奇人でもあった独自の天才評論家「小室直樹」¹⁾の愛弟子として知られている。

この本の中で、とくに著者の目を引いたのが、最後に近い章で「もう金に果たせる役割はない」というものである。氏はここで、マネーゲームに長けた欧米のヘッジファンド等マネーゲームで財を得ている各人を総括し（氏はこの本の中で、ロックフェラー財団の会長を頂点とする国際シンジケートがマネーゲームを通じて経済を席巻している、と説く）、その限界を語り、最終的にはモノ造りに勝る経済はない、と結論付けている。まさに然りと手を打ちたい。もう二五年も前のことになるが、バブル経済に踊らされた頃（こ

の時は土地の値上がりを前提としていた）、右肩上がりに値上がりする株の含み益を前提として農場拡張を計画していた経営者が、バブル崩壊のために人生計画を大きく狂わされ、果ては業界を離れるに至った悲劇も聞いている。

また、昨年までは大きな利益を提供していたドル、ユーロのデリバティブで、円の暴騰によって大損を被り嘆いていた経営者もいる（ちなみに五、〇〇〇万円分のドルを一二〇円、五年間の契約でデリバティブを買った、一ドルが七八〜七九円に値下がりした場合に単月で五、〇〇〇万円もの補填を契約の期間支払う必要がある、という）。

著者は最近改めてドラッカーの本を読み返している。ドラッ

カーは二〇〇〇年前後にさまざまな社会現象に関して大胆な予測を立てている。その中に「ネクスト・ソサエティ（次世代社会Ⅱ著者訳題）」というものがあり、個人の希望と人生観が成熟し、かつ国境が明確でなくなつたいま、「資金」は必要条件であり続けるものの、その主役の席を降りつつある。これからの社会では、人材こそが真の資材であり、財産である、と述べている。そして、社会の軸を成すのはNPO（非営利団体）である、という論旨の予測を立てている。

彼のいう人材とは、単純な労働に従事する人ではない。知的生産技術を有する「プロフェッショナル」である。情報を理解し駆使できる人材である。そし

て、情報とは知識としてマスコミ等から得られるものではなく、生身のヒトとヒトが接してやり取りするもので、リアルタイムで発生する生きたものを指す。

養鶏業界は第二次産業化したある意味究極の農業である。装置産業化された生産システムは一見単純労働に従事する能力がある人材であれば、従事するに過不足がないように感じられ、語られることが多い。しかし、装置産業化した生産環境であっても、生産の過程に生きがいを生むような知的なかわりが生み出せる余地がある場合には、従事する人員のレベルは日々向上していく。一方、単純労働であることに甘んじて毎日の労働をただ単に生活の糧を得るための耐えるべき苦痛な時間と受け止めている人は、十年経過しても成長は期待できないであろうし、働くことへの夢は持ち得ないであろう。

働く人は誰でも自分の職業にプライドを持ちたいと願っている。そうした人々に働きがいを

分け与えることにこそ、リーダーの夢があるものと信じている。

1) 小室直樹博士…一九三三年九月九日〜二〇一〇年九月四日。法学者、法社会学者で法学博士。東京都世田谷区生まれ。幼少時に父が死に、福島県会津若松市へ転居(母の故郷)。貧しかった会津時代に渡部恒三氏との知遇を得て、生涯付き合った。京大卒後大阪大学大学院経済学研究科へ進学するも博士課程中退。フルブライト留学生として三年間でミシガン大・マサチューセッツ工科大・ハーバード大で計量経済学、経済学、社会心理学を学ぶ。帰国後すぐに、東大で政治学、社会人類学、計量政治学、法社会学を学んだ。その後ポラントニアで自主ゼミを開講。小室ゼミの出身者は橋爪大三郎、宮台真司、副島隆彦、盛山和夫、志田基与師、等々。一九八〇年に『ソビエト帝国の崩壊』(光文社)がベストセラーとなり、評論家として広く知られた。反田中角栄元首相世論に激しく対立、公共放送で極論を叫んだため奇人として扱われた。